

昭和2年の木曾川

美濃加茂市民ミュージアム 館長 可児光生

木曾川の中流域の開発は、大正初めに著名な地理学者・志賀重昂（しげあき）によって日本の「ライン」と風景が絶賛されたこと、昭和二（一九二七）年、新聞社が企画し全国的に大きな盛り上がりをもせた「日本新八景」で「木曾川」が一席選定されたこと、この二つの大きな評価を経て、飛躍的進展をみせていきます。

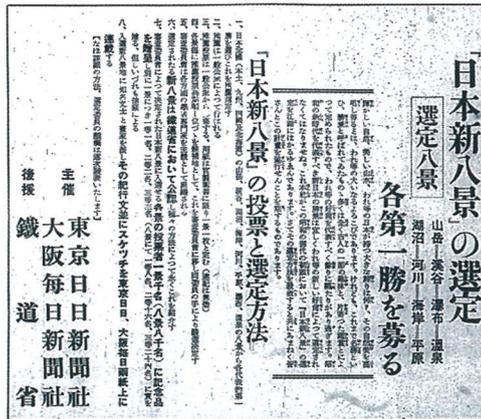
「われ等の新しい好尚」と国民個人レベルの参加意識と郷土愛をくすべし、「昭和」という新しい時代の幕開けに合わせて企画された日本新八景と木曾川のかかわりについて紹介します。



志賀により日本の「ライン」と絶賛された犬山城下の木曾川

一 日本新八景の募集

大阪毎日新聞と東京日日新聞は、昭和二（一九二七）年四月九日の紙面に次のような社告を大きく掲載しました。



「日本新八景」選定の社告〈出典：愛知県図書館蔵〉

「輝かしい自然、美しい山水、われ等日本が持つ大きな誇りは何？、その自然美を高唱し得るとは、われ等の大いなるよろこびであります。けれども、これまで名勝といひ、勝景と呼ばれてゐたものの多くは全く古人の一部の趣味と、片寄った鑑賞とによって定められたもので、われ等の好尚を代表すべく餘りに隔たりがあり過ぎます。昭和の新時代を代表すべき新日本の勝景は宜しくわれ等の新しい好尚によって選定されなくてはなりません。これ本社がこの昭和に時代の初頭において「日本新八景」の選定を江湖にはかるゆゑんであります。さてその選考方法を發表すると共にあまねく皆さんとの計畫を遂行せんことを期するものであります。」（大阪毎日新聞、東京日日新聞「選定告知社告」昭和二（一九二七）年四月九日）

「日本新八景」の選定を広く国民に募集するお知らせです。前年の十二月に大正天皇が没し、

日本国中が悲しみに沈んでいましたが、昭和の幕開けを新たな企画とともに進進していくという趣旨で新聞社は「日本新八景」の募集を全国に呼び掛けました。新時代への膨らむ期待が感じられます。

「東京朝日」「大阪毎日」「東京日日」など主要全国紙は、大正十一（一九二二）年から翌年にかけて普通選挙実現のキャンペーンを張りましました。その動きは昭和三（一九二八）年の普通選挙の実施として結実することになります。

また大正十三（一九二四）年には、婦人参政権獲得期成同盟会の創立に象徴されるような女性地位の向上の要求の動きが始まるなど、大正の後半から昭和の初めは、大正デモクラシーという民主化の大きな潮流が全国に広がりを見せていく時期でもありました。

さて、この社告の文面からは、これまでは文人だけが称賛し愛でる対象であった名勝や景勝の地を、「われ等」すなわち、一般国民の身近なものにしていくという考え方が見えてきます。そして昭和という新時代を迎え、国民自らが社会の主体となるべきだという理念が感じられます。

社告本文に続き選定方法や選定後のことについて八項目ほど上げていますが、注目されるのは「新八景は鉄道省において公認し種々の方法によって永くこれを紹介する」「入選八景地に地名文士と書家を派しその紀行文並にスケッチを東京日日、大阪毎日両紙上に連載する」という二項目です。

新聞社としては、新八景を選定するだけでなく、鉄道省にも関わりを持たせ、いわば国策として国民の旅行や観光に力点を置こうとしました。そして、文士と書家を選定地へ派遣し紀行文などを描かせて国民の旅行気分を盛り立てていくという、極めて戦略的なキャンペーンでした。国内では鉄道交通網の発達や生活の豊かさに伴って、国民の間では旅行ブームが起

きていました。

外国人観光誘致を目的として明治四十五（一九一四）年に設立された「ジャパン・ツーリスト・ビューロー（JTB）」はこの年、協賛企業からの収入を邦人向けの旅行代理業務手数料収入が上回るようになりました。国内旅行の需要の高まりを象徴しています。

二、熱狂する国民

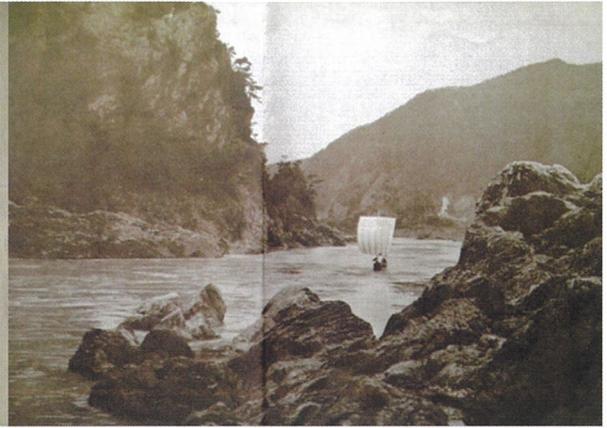
昭和二（一九二七）年四月に八景の募集が始まると、たちまち大きな反響を呼び起こしました。最終的に投票総数は九千七百万通にのぼりました。当時の人口六千万人で一年間に流通する葉書が約一億通だったといわれます。それに匹敵するはがきが、たった一か月余りで押し寄せたのです。

募集開始後、地元の候補地を当選させるために県知事が自ら先頭に立って運動をしたり、入選期成同盟会を結成して大量の組織票を集めたりするなど、八景選出は国民を熱狂の渦に巻き込む一大イベントになりました。この時代が個人の意見や考えを投票で示すという生活行動の変化の時でもあったこと、郷土の誇りやアイデンティティとして風景を位置づけようとしたことが背景にあると思われる。

五月二十日に、国民のはがき投票が締め切られます。七月六日にその投票数などをとにした推薦候補地が数点選出され、その中から審査員によって各分野で次のように一席が選ばれました。

- (山岳) 雲仙岳
- (渓谷) 上高地渓谷
- (湖沼) 十和田湖
- (海岸) 室戸岬
- (河川) 木曾川
- (平原) 狩勝峠

- (瀑布) 華厳滝
- (温泉) 別府温泉



日本八景選定後の新聞社による記念写真入り封筒（左）と木曾川の記念写真（右）

三、自然地理学的評価

募集翌月の五月十三日付けの紙面には、審査委員の名簿が発表されました。そこには、本多静六、田村剛、田中阿歌麿、小川琢次、脇水鐵五郎といった林学者、地理学者や地質学者が名前を連ねており、選考にあたって自然科学的な観点が重視されていることがわかります。国立公園の父とも呼ばれる田村剛は、「国立公園法の成立に尽力した人物です。八景に選ばれた景

勝地の多くは、昭和九（一九三四）年以降の国立公園指定につながっていくこととなります。

さて、河川の部のはがき投票の一位は百万票を獲得した「長良川」でした。ところが九十三万票で三位であった「木曾川」が審査委員の選考によって逆転し一位となったのです。詳しい経緯は不明ですが、審査委員の一人である地理学者・本多静六は、この一〇年ほど前に木曾川を次のように評しています（注1）。

「有体に謂へば日本ラインの景は正に是れ京都嵐山の景を縦横数倍に拡大したるものと云ふべく或は又欧州ラインの風景に更に東洋山水画風の技巧を加味したるものとなすを更に適評と云ふべし。要之日本ラインの山水美は直に是れ自然の神が幾億万年を費して造り成したる精巧無比なる一大美術にして最早之に何等人工美を加ふるを要せざる也…」

木曾川を日本の「ライン」と絶賛した地理学者・志賀重昂の影響も受け、本多は単なる風光明媚だけでなく自然地理学的観点と世界的視点から極めて高く評価していました。審査を左右する実力者であった本多の見解が最終審査に影響を与えたことも十分考えられます。



日本ライン下りのポイント（可児川との合流点）

四、北原白秋が見た木曾川

北原白秋は、選定後に新聞社の依頼を受けて木曾川を訪れ、八景選定企画として次のような紀行文「日本八景をめぐりて」を東京日日新聞に寄せました（注2）。

〔前略〕 斎藤拙堂の「岐蘇川を下るの記」に曰く

「石皆奇状兩岸に羅列す、或は峙立して柱の如く、或は折裂して門の如く、或は渴驥の澗に飲むが如く、或は臥牛の道に横たはる如く、五色陸離として相間はり、皴率ね大小の斧劈を作す、間ま荷葉披麻を作すものあり、波浪を濯ふて以て出づ、交替去来、応接に暇あらず、蓋し譎詭変幻中清秀深穩の態を帯ぶ。」

兜岩、駱駝岩、眼鏡岩、ラン（ママ）オン岩、亀岩などの名はあらずもなである。色を觀、形を觀、しかして奇に驚き、神悸き、氣眩すべしである。

拙堂も親た五色岩こそまた光彩陸離として衆人の眼を奪ふものであらうか。

ただ私の見たところでは、この蘇川峡のみを以てすれば、その岩相の奇峭は豊の耶馬溪、紀の瀨八丁、信の天竜峡に及ばず、その水流の急なること肥の球磨川に如かず、激湍はまた筑後川の或個處にも劣るものがある。これ以上の大江としてはまた利根川がある。

ただこの川のかれらに遙に超えた所以は変幻極まりなき河川としての綜合美と、白帝城の風致と、交通に利便であつて近代の文化的施設の余裕多き事であらう。原始的にしてまた未来の風景がこの水にある。（後略）（昭和二（一九二七）年八月三十日付東京日日新聞）

白秋は、江戸時代の文人である斎藤拙堂が評したように木曾川の奇岩などを鑑賞の対象として認めつつ、新たな視点を木曾川に吹き込みま

した。それは、「河川の総合美」「白帝城の風致」「交通に利便」でした。風景や自然景観を総合的に捉え、交通網などの利便性を含めた将来の可能性も観光資源の要素として位置づけようとしたのです。現代の観光との共通点をここに見ようが気がします。

この記事で、白秋は木曾川のことを「蘇川峡」と独自に名付けていることに注目します。また、昭和二年八月二十八日の記事（木曾川）「（一）左写真」では、白秋は地元の人との会話について、

「日本ラインという名称は感心しないね。毛唐がライン河を仏蘭西の木曾川とも蘇川峡とも呼ばないかぎりだね。お恥すかしいぢやないか」「さうですとも、日本は日本で、ここは木曾川でいい筈なんだ」

木曾川橋畔の雀のお宿の主人野田素峰子が直ぐと私に和した。

「みんながよくさう言ひますんで」と書いています。「日本ライン」という「ハイカラ」な呼び方に対して白秋は不快感を示し、日本古来の名称にこだわりの持っている様子が見えがえます。

また同日のこの記事では、

「昔と今と、変われば変わるものだ、私は思ふ、さうだ、あの頃はまだ日本ラインといふ名すらさして知られてなかったのだ」と記し、木曾川が「日本ライン」と呼ばれるようになった今の時代を感慨深く述べています。

昭和二（一九二七）年の八景投票に際し、「日本ライン」は深谷ですか、河川ですか。」という質問が投票者から寄せられました。それに対するの新聞社からの回答は「日本ライン」という名称はありませんから、木曾川として、河川の部に取扱いします。」でした。

このやりとりは、投票対象の八景の区分と定義が明瞭ではなかったということを示していること、そして木曾川に対しての「日本ライン」という呼称が、この頃国民の間で一定の定着をみせていたことを想定させるものです。

五、風景の大衆化

日本八景として「お墨付き」が与えられた木曾川の観光は、これをきっかけにして大きく進展をみせていくことになります。直後の天皇行幸もあつて皇族や海外から賓客などの訪問も多くなりました。

可児郡土田、加茂郡の太田や古井、坂祝の各乗船地から犬山城まで遊船を楽しむ客が増え続け、日本を代表する観光地「日本ライン」として活況を呈します。

八景をめぐる地域の人々の動きは、「風景」がより身近に楽しめるものとして大衆化されていくことでもありました。八景選定直後の昭和二（一九二七）年五月からの「愛知県下新十名所」「三重縣下避暑地」（同年七月）、「岐阜縣下新十名所」（同年一〇月）と地元新聞社によって県ごとの名所選定が行われ、日本八景同様大きな盛り上がりを見せました。

古来の概念から脱し、国民自らの手によって名所を創出していくという新たな動きが、昭和という新しい時代の幕開けとともに起きたのです。

（注一）本多静六『日本萊因風景の利用策』大正八（一九一九）年。

（注二）「木曾川（一）」（九）（昭和二（一九二七）年八月二十七日〜九月四日）。いずれも後に、北原白秋『旅装読本』昭和十一（一九三六）年に「日本ライン」として所収。

昭和二〜三年の動き

昭和二（一九二七）	昭和三（一九二八）
二月十日	四月
四月六日	十一月二十日
四月九日	十一月二十日
五月二十日	十月九日
五月二十日	七月十二日
七月六日	八月二十七日
七月十二日	十月九日
八月二十七日	十一月二十日

東京日日新聞に寄せられた北原白秋紀行文「日本八景をめぐりて」（昭和二年八月二十七日付）
 < 出典：愛知県図書館 >



「ライン下りは太田から」ポスター（昭和3年）

■参考資料
 「日本八景の誕生」「環境イメージ編 人間環境の重層的風景」白幡洋三郎 弘文堂 一九九二年
 「風景の大衆化と郷土」『岐阜史学』一〇四号 可児光生 岐阜史学会 二〇一五年